２０１５年度　博士学位論文審査報告書

No.1　　提出期限：口頭審査 2016 年 2 月 25 日(木) 後 3 日以内厳守

日本言語文化専攻	氏名	中尾　莉奈	学生番号	G13213
論文題目	『豊饒の海』論 ―三島由紀夫による「世界解釈」の視点―			

審査概要及び評価(2000 字)主査が記入(ワープロで清書してください)

本論文は三島由紀夫の『豊饒の海』を論じたものである。この作品は、研究史的に見れば、当初は三島の死と関連付けて作家論的に論じられることが多かったが、その後はテクスト自体が様々な観点から論じられてきた。また、テクスト内に見える三島のこれまでの作品との比較検討も行われてきた結果、『豊饒の海』は作家三島由紀夫の集大成という位置づけがほぼ確立している。

本論考は、そうした豊富な先行研究を踏まえ、これまでの先学の成果に立脚した上で、三島のいう「世界解釈」という視座に立って『豊饒の海』の全体像を解釈していこうとする試みである。

論文全体の構成は、第１章から第４章の各章にそれぞれの作品論をあて、最後の第５章で作品総体としての『豊饒の海』を考察するものである。

第１章は「春の雪」論だが、副題を「嘘を核とした作品構造」としているように、作品中の「嘘」を、小説を動かしてゆくものとして、作品構造の中心に求めている。この視点は佐藤秀明氏の論考に負うところも多いのだが、佐藤論文では嘘を見抜くものを読者であるとしていたが、本論考でこれを「作中の女」としたことは新しい指摘である。また、そのように解釈することで、「女性優位の構図」を導き出し、それをこれ以降の巻に引き継がれていくものとして位置付けたことも十分な意味を持っている。

第２章は「奔馬」論だが、副題を「純粋を貫くための死」とし、「純粋」にこの作品の主題を求めた。

これまでも先行研究の多くがこうした観点から論じられてきたが、本論では勲の孤独を軸としながら、彼の死を「純粋行為の完遂のための死」として意味づけている。

また、本多を「理知」と「情熱」というキーコードから論じ、彼を輪廻転生の証明者の役割とした。

続く第３章の「暁の寺」論では、副題を「法の受肉者と模倣者」としている。

「暁の寺」は、一般に起承転結の転にあたるとされるが、これまでも『豊饒の海』全体を貫流していた輪廻転生のモチーフの理論的な裏付けとして、ここで「唯識」、「阿頼耶識」といった観念が提示される。

ここでは、そうした要素に注目しながら、ジン・ジャンを「法の受肉者」、法を模倣する本多を「法の模倣者」と意味づけることで、「法の出現の過程」を模索し

ている。この観点もまた、先行の小林康夫氏の論に負うところだが、本多を弱者とし、女性の優位性を語るところには独自の見解も見いだせる。

また、本多の「覗見」を、「見える形で示される転生の証拠の放棄」と意味づけた点も注目してよい。

第4章では「天人五衰」論を「本多と透の自意識」という副題の元に考察している。

ここでは、透を三好行雄氏の論を起点に考察することで、その存在の複雑さの持つ意味を明らかにしようと試みた。

また、本多については、ここに至って情熱が衰微したとし、観察者であることの役割は終焉したと解釈している。

これまでは、基本的に個々の作品を論じてきたが、最終章の第5章では『豊饒の海』全体を見渡す形で論じ、その文芸的価値に迫ろうとする。そして、「三島の企てた「世界解釈」は三島の憎むものの敗北という形で、三島由紀夫の望む世界を浮き彫りにするものであった」と結論付けている。

以上が中尾論文の概要であるが、本論考は先行研究を十分に咀嚼し、それらの成果を踏まえた上で問題点を立て、詳細に論じていったものである。個々の作品論にも、それぞれに論者なりの発見もあり、またそれなりに新しい解釈を提示しえたと言える。

一つ一つの作品を精細に考察し、作品論を積み重ねていったことは、結果的に『豊饒の海』の全体像を論じる最終章で実を結ぶことになった。すなわち、『豊饒の海』の持つ文芸としての価値に迫りえたことは大いに評価される。

最終的に辿り着いた三島の「世界解釈」に対する結論については異論もあろうし、また単純化しすぎているという見方も成り立つであろう。しかし、ともかく、自分なりの視座を示し、作品に価値評価を与えたことは十分な意味を持つであろう。

中尾論文を総合的に評価するならば、先行研究の検証、三島のこれまでの作品との関連、問題点の立て方、論の構成、論の進め方、結論、共に博士（文学）の学位に値するものと判断される。

口述審査	合　格　・　不合格		
主査	金田文雅 ㊞		
副査 宮本陽一 ㊞	副査 足立直子 ㊞	副査 細川正義 ㊞	